

英語科の「深い学び」を実現する授業づくり

何ができるようになるか

< 育成を目指す資質・能力 >

**英語を聞く、読む、話す、書くことを通して
コミュニケーションを図る資質・能力**

学びに向かう力・人間性

- ・主体的にコミュニケーションを取ろうとする態度
- ・聞き手、読み手、話し手、書き手に対する配慮

知識・技能

- ・音声、語彙、文法、表現、言語の働き、文化的背景等に対する知識・理解
- ・知識をコミュニケーションにおいて活用する技能（聞く・読む・話す・書く）

思考力、判断力、表現力等

- ・コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて情報を整理したり、話したり書いたりする内容を吟味して適切に表現する力

何を学ぶか

どのように学ぶか

< 学習内容 >

< 学習過程 >

聞く

読む

話す

書く

総合的・統合的な学習

音声

語彙

文法・表現

言語の働き

文化的背景

①付きたい力（到達目標）を明確化する

→CAN-DO リストの活用

②課題意識、学習意欲を高揚させる

→オーセンティックな場面設定

③知識・情報を関連付け、気持ちや考えを再構築し、豊かに表現させる

→「問い」の吟味

④既習の語彙を活用して適切に表現させる

→コミュニケーションの場での思考・判断

1 「深い学び」を実現する単元構成

本校英語科では、授業における「主体的・対話的」な生徒の姿が「深い学び」につながると考えている。「深い学び」を実現するための学習過程として、以下の4項目を重点として単元構成を行っている。

- ①CAN-DO リストを活用して付けたい力（到達目標）を明確にすることで、英語で適切に伝え合うコミュニケーション能力を育成する。
- ②英語使用におけるオーセンティックな場を設定することで、生徒の課題意識や学習意欲を高める。また、「見方・考え方」を働かせて目的や場面、状況に応じてコミュニケーションを行うことができるようにする。
- ③学習課題や発問といった「問い」を吟味することで、読んだり聞いたりして得た情報や知識を相互に関連付けてより深く理解できるようにする。また、その情報を精査して気持ちや考え等を形成し再構築するとともに、相手を意識しながら自分の感じたことや考えたことをより豊かに表現できるようにする。
- ④自分の考えを表現する際は、既習の言語材料の中から適切な語彙や表現を見いだすように考えさせることで、外国語によるコミュニケーションの場での思考力・判断力を養う。

これらの項目を生徒の目線に置き換えると、次のようになる。①自分が目指すゴールの姿がわかる。②「英語で話す必要がある」「話してみよう」と思える場面が設定されており、どう考えればゴールに近づくかの道筋が見える。③先生からの問いかけや友達との対話をきっかけに、自分の気持ちや考えをどう表現するかについての考えが深まる。④どう表現するかを判断する際、これまで学んだ表現を使って英語で言えないかを考え、何とか自分の気持ちや考えを相手に伝えることができる。この学習過程を、どの単元においても念頭において構成するとともに、既習の内容をどう活用・発揮・関連付けすることができるかも意識して組み立てている。

2 「見方・考え方」を働かせる「問い」

英語科の「見方・考え方」は、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」とされている。ここにある「目的や場面、状況」および「他者」に対する意識は、コミュニケーションを行う上でどれも欠かせないものであり、常に全ての「見方・考え方」を働かせて他者と関わっていると考えている。「話す」言語活動、とりわけ他者と情報や気持ち、考えを伝え合う活動においては、「即興性」を重視している。上記の「見方・考え方」を生徒と共有した上で、相手の発言を受けて応答したり、頭に浮かんだ内容をその場で表現したりする活動を通して、実際のコミュニケーションの場で活用できる資質・能力を育成したいと考えている。その際に教師から提示される「問い」は、生徒に「見方・考え方」を働かせ、「目的・場面・状況」および「相手意識」を踏まえた理解や表現を促す足場かけ（scaffolding）となるものであり、授業の中で極めて重要な役割をもっている。そのため、「問い」の目的を明確にし、発問を吟味して計画的に実施していくことが大切となる。一方、実際の授業では生徒からの想定外の発言もあり、教師が即興的に効果的な問いかけを行っていくことも求められる。実際の授業での「問い」については、次ページ以降の授業実践事例を参考にされたい。

3 「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

生徒が主体的に、課題意識をもって取り組むことは、「深い学び」を実現するために不可欠な要素である。授業においては学習課題や状況設定をはじめとする「問い」によって主体性を高める指導を行うが、その評価に当たっては、適切な機会にパフォーマンステストと振り返りを行うことが重要であると考えている。パフォーマンステストでは、単元の評価規準（基準）を生徒と共有し、目指す姿に向かっている姿を評価する。振り返りでは、生徒自身が自分の学びの状況をメタ認知し、目指す姿になるために今後どうすることが必要なのかを考えるためのものと捉えている。

I 第1学年実践事例

単元名：Unit 9 Think Globally, Act Locally

(New Horizon 1)

1 課題設定

「Think Globally, Act Locally について考える。～テキスト内容をふまえ、自分たちが身近で行っていることについて短いやり取りを行おう～」

2 単元の目標

国際協力について考え、自分たちが身近で行なっていることについて短いやり取りをすることができる。

3 本校の研究と本実践の関わり

英語科では、見方・考え方を働かせて深い学びを実現する授業づくりに必要な要素の一つとして、「学習課題や問いを吟味することで、読んだり聞いたりして得た情報や知識を相互に関連付けてより深く理解できるようにする。また、その情報を精査して考えや意見を形成し再構築して自分の考えたことや感じたことをより豊かに表現できるようにする。」を挙げている。

本単元は本校が使用している教科書 *Sunshine1* (開隆堂) Program 6 “On the Way to School” に関連付けた投げ込み教材である。先に挙げた授業づくりに必要な要素に関して、生徒は Program 6 を通して、ケニアの子どもたちの教育問題について学んだ。子どもたちは自分たちの村に学校がないため、危険なサバンナを渡って遠距離通学せざるを得ない。将来の夢のために学校に行きたいと語るケニアの少年の話を読んで、生徒は毎日学校に通うことができているのが当たり前という自分たちの環境や学校で学ぶ意味について自分たちなりに考える機会を得た。今回 *New Horizon* で扱う本単元では途上国の水問題を扱っているが、内容理解を通して生活用水の供給システムが整っていないという問題が、実は子どもたちの教育問題につながっているという状況に生徒は気付くはずである。この2つの単元を関連づけて授業で取り上げることで、生徒にはより深い学びを期待したい。

また、本単元のタイトル “Think Globally, Act Locally (広く考え、身近なところから行動しよう)” は、特に環

境問題、国際協力について最近頻繁に耳にする考え方であるが、この言葉のもつ意味について深く考えたことのある生徒は少ない。本単元で扱っている水問題への援助の方法を考えると、生徒自身が身近に困っている人たちに対して何をしているのか、彼ら自身の生活に根ざした意見のやり取りを行いたい。

4 全体計画 (全3時間)

第1次 ・単元の目標を理解する。

- Preview, Story 1 からメグの夢について理解する。 (1時間)

第2次 ・対話文 (Story 2) を読み、メグと海斗がしたいことを把握する。

- 動詞+to 不定詞を含む英文の形・意味・用法を理解する。 (1時間)

第3次 ・発表内容 (Story 3) を読み、発表の要旨をつかむ。

- 国際協力について考え、自分たちが身近でできることについて短いやり取りを行う。

(本時、1時間)

本時 (3/3時間) の授業の実際

(1) Short Review

教師が生徒とやりとりしながら前時までの内容を押さえ、キーワードである “people in need” を確認。

(2) Oral Interaction

3枚の写真についてやり取りを行った。

- What is she / he doing now?

“Washing dishes / Cooking / Getting water など”

- What do you usually do for your family?

“Washing dishes / Cleaning the bathroom など”

- Do you usually _____ ?

- Do you usually get water from river for your family?

“No! No!”

- How do you get water?

“I get water from “蛇口”.”

- Yes, you can get water anytime from the tap. Turn the tap, and you can get water easily.

- These pictures show the life with water.

We can't live without water.

生徒の日常生活や体験と教科書本文が関連付けられるようにやり取りを重ねた。



(New Horizon 1 Unit 9 より抜粋)

これまでの oral interaction で水が日常生活に必要な不可欠であることを押さえ、次に本時で扱う内容への導入を行った。

Story 3にある2枚の写真について教師—生徒、生徒—生徒でやり取りを行う。

• What can you see? You can see children and a big river over them. What are they doing? Can you guess?

“They are carrying bags? Water.”

• Yes. They are carrying water to their house for their family.

• Why do they carry water to their house?

“I don't know. 水道がないから。”



• What is this? (井戸を指して)

“Pomp / Well”

• You can see many kids. They are smiling.

Why are they smiling in this picture?

“They can get water now.”



水問題に苦しんでいる地域について子供達の写真を通して考える時間とした。教科書本文にふれる前に、上記の

写真からわかること、推測できることなどを話し合った。川から水を運ぶために毎日7、8時間費やす子どものこと、幼い子どもが20キロ以上の重さの水を運んでいること、川から汲んでくる水が不衛生なために病気にかかってしまうこともあること、などを oral interaction で導入した。生徒はきれいな水が簡単には手に入らないという状態の具体を驚きをもって受け止めた。

(3) Listening

Pre-Q: What does the presenter want for these kids?

“Money”

教科書は閉本のまま、概要を捉えた。

(4) Reading

• Why do they look happy?

• “On the other hand”とは?

• “In places like this”とは?

• 質問タイム

教科書を開本し、本文内容の確認を行った。本文の読み取りのポイントとなる部分について生徒に質問をし、その後生徒からの質問タイムをとった。生徒からあがった質問としては、“On the other hand”の本文中での意味の再確認があった。

(5) Thinking and Interacting

Think globally”について教師の話聞く。

水が当たり前に入る日本との比較。水問題が子供たちの教育機会の喪失につながっている事実。

“Act locally” について考え、やり取りを行う。

• What can you do for these children now in Japan?

“I give money.”

“I don't know. I can't do anything.”

• You can't do so many things for the children in these countries, but you can help people in trouble around you.

• What do you do for people in trouble in your daily lives?

How does your friend or family help you?

For example, I always try to help young mothers with babies in towns. I talk to them and ask them any help they need or not (教師による例示) .

“I lend my pens to my friend,”

“I carry heavy bags for my friend.”

“I always say thank you to my family.”

“My friend always listen to my talking.”など

ここでは、本単元のまとめとして“Think Globally, Act Locally”という単元のタイトルについて扱った。本時までの授業を通して“Think Globally”については各自が学びを深めてきたが、“Act Locally”について考えることは生徒にとって難しい様子うかがえた。自分の身の周り(友人、家族、地域)の人たちが困っているときに、生徒が実際にしたこと、現在やっていることを生徒同士でやり取りした。

・ Thinking Time (2 mim)

発話内容を個々で考える時間。どんな内容を、どう英語で表現するかをプランニングする時間である。

・ Interaction (1回目、2 turns 程度のやり取り)

(例)

S1: How does your friend help you?

S2: えー? なんて言えばいいかわからない。忘れ物した時貸してくれる。

S1: Borrow? Lend...かなあ。My friend lends things?

S2: My friend lent me...忘れたもの?

S1: んー?

(生徒の発話そのまま)

・ Sharing Time

1回目の生徒—生徒のやり取りの後に全体でシェアリングの時間を設けた。1回目のやり取りの様子を机間指導で把握したところ全体的に生徒間でやり取りを行うのが難しそうな様子が見えたので、共有の際に生徒—生徒のやり取りではなく、教師—生徒のやり取りとした。

・ Interaction (2 turns 程度)

(例)

S3: I sometimes help my mother. I wash dishes after dinner.

S4: Wow, that's nice. I wash dishes, too. My mother, she is busy every day.

S3: My mother, too. えーっと、他には・・・

S4: あっ、my friend always listen to my talk. She is very kind.

S3: そうそう。Me too, me too!

4 成果と課題

(1) 成果

- ・教科書の内容理解を oral interaction を通して行ったことは生徒の学びを深めるのに有効に働いた。
- ・本時で扱った Story 3 の内容理解を、単元のトピックである“Think Globally, Act Locally”について考える糸口とした授業展開は生徒の思考を活性化し、発話を促すことができた。
- ・身近な話題について扱ってきた中学1年生の授業で、最終盤の段階(2月末)で社会的な話題にも踏みこんだ内容を扱い、発話機会を設けた。このことは、今後、社会的な話題を扱っていくための Small Step となったと考えられる。社会的な話題について扱う際も、常に身近な問題、トピックとして捉えられる土台作りとなった。

(2) 課題

- ・“Act Locally”の解釈については課題が残った。授業者は生徒が身近な人に対して実際に行っていることをやり取りすることに価値を置いた授業展開としたが、本時で扱った水問題について自分ができることを生徒が考え発話するという展開もあったのではないかという意見もあった。
- ・授業中に生徒の発話を見取り、生徒の到達度に合わせて授業展開を臨機応変に調整する部分に十分な時間がかけれなかった。授業の後半にあるインタラクションの場面で、生徒が抱える困難を解決するシェアリングにもっと時間が必要だったが、本時の時間内では収まらず、次時に持ち越すこととなった。指導案上は生徒同士でやり取りを行うこととなっていたが、個々の発話の段階でつまづく生徒が多く、本時ではやり取りまで至らない様子が散見された。

(授業者 吉崎 理香)

II 第2学年実践事例

単元名：PROGRAM3 Taste of Culture

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 2)

1 課題設定

「真央と Daniel の会話の内容をふまえて、Daniel に紹介したい食べ物をその魅力が伝わるように紹介しよう」

2 単元の目標

日本・世界の屋台文化について知り、興味のあるものについてその魅力を詳しく説明しながら紹介することができる。

3 本校の研究と本実践の関わり

英語科では「深い学び」を実現するための授業づくりをするため、「学習課題や発問といった『問い』を吟味することで、読んだり聞いたりして得た情報や知識を相互に関連付けてより深く理解できるようにする。また、その情報を精査して気持ちや考え等を形成し再構築するとともに、相手を意識しながら自分の感じたことや考えたことをより豊かに表現できるようにする。」という項目を挙げている。

本単元における「深い学び」の状態とは、相手に紹介したい屋台料理の魅力を伝えるために、何をどのような表現を用いて言えばよいのか考えて発話している状態のことを言う。

本授業実践では深い学びの状態に近付けるため、生徒は日本の食文化について再認識したり、異国の屋台食文化について学んだりするだけでなく、紹介相手の Daniel の立場になって考え、Daniel がどのような情報を求めているかを思考・判断して主体的・対話的な活動を行った。そのために、教師のモデルを示したり、全体でペアで行ったやり取りの内容について共有したりすることで目指す姿を共通理解させようとした。

4 全体計画（6時間：本時3／6時間）

- 第1次 ・不定詞の名詞的な扱い・動名詞についての意味・用法の理解（2時間）
- 第2次 ・日本の祭りの食べ物の由来について知り、Daniel にぜひ食べてみてほしいものについて伝える活動。（本時、1時間）
- 第3次 ・ニューヨークの屋台食の説明から、身近な日本の食文化を描写・説明する活動。（1時間）
- 第4次 ・真央の発表をモデルとし、紹介したいものの魅力が伝わる発表の仕方（内容面・音声面）の理解（1時間）
- 第5次 ・日本の屋台食について発表するパフォーマンステスト（1時間）

5 本時（3／6時間）の授業の実践

(1) Oral Interaction

祭りの写真を見て教師とやり取りをする。

- | | |
|-----|---|
| T: | Look at this picture. Daniel and Mao are in the festival. What food stands can you see in the picture? |
| S1: | I can see <i>takoyaki</i> , <i>ringo-ame</i> , American dog. |
| T: | Do you know any other food stands in festivals? |
| S2: | Crepe, baby-castella, <i>yakisoba</i> ... |
| T: | We can eat many kinds of food in festivals. As you can see, Mao is talking with Daniel about food. Mao is going to introduce <i>wata-ame</i> to Daniel. |

(2) 学習課題を確認する。

真央と Daniel の会話の内容をふまえて、Daniel に紹介したい食べ物をその魅力が伝わるように紹介しよう
--

(3) 本文の内容を聞く。

聞く前に以下の2つの質問をしておき、内容を聞き取らせる。その後質問の答えを確認する。

Pre-Q1: What does Mao want to eat?

Pre-Q2: What does Daniel want to eat?

(4) 教科書を開本し、本文全体の内容を確認する。



(5) 本文の内容から真央と Daniel の対話後の Daniel の行動を推測する。

T: Look at the page 32 again. What did Mao introduce to Daniel?

S1: Ah.. *Wata-ame*.

T: What is it in English?

Ss: Cotton candy.

T: That's right. Do you think Daniel will eat cotton candy after this conversation? Please tell me your idea and why.

S1: No. Because Daniel knows about cotton candy. He wants to eat something new.

(6) 教師のモデルを見る。

【教師のモデル】

T: Then, what food do you want to introduce to Daniel? Before you talk, I'll try. I want to introduce *takoyaki*. You can eat it in the festivals. I always eat *takoyaki* in festivals. It has octopus in it. You can eat it with sauce and mayonnaise. If you like something salty, you'll like it. Many people like it, too. It's about 500 yen. Please eat it.

モデルを聞いた後に、その内容について教師と生徒で確認することで、目指す発表を共有する。

【目指す発表の状態について】

- ・ 紹介する食べ物の魅力が説明できる。
- ・ Daniel の立場で紹介する食べ物を決めている。
- ・ 相手に勧める表現を使っている。

(7) 紹介する食べ物の魅力についてや、相手意識にたってどのように説明するべきか考える。

T: "What food do you want to introduce to Daniel at the Japanese festivals?"

(8) ペアで Daniel に紹介したいものについて伝え合う。

S1: I want to introduce shaved ice.

S2: Oh, shaved ice!

S1: You can eat it in many Japanese festivals. And it's delicious. I like strawberries.

(9) ペアで発話した内容について全体で共有する。

S1: I want to introduce an apple candy. Eating an apple candy at the festival is very popular in Japan. Its taste is really good. You can eat it at home after the festival. It's not so expensive. And you can choose the size. You should try it.

S2: Oh, I see. Sounds delicious.

(10) ペアを代えて発表を行う。

S1: I want to introduce shaved ice. You can eat it in many Japanese festivals. It has many kinds of flavors. Especially, green tea flavor is popular for foreign people. Japanese people like to eat it, too. And the taste of shaved ice at the festival is different a lot. It's very soft and delicious. You should try it.

S2: Oh, I see. I'll try it.

- (11) 指名された生徒が発表し、全体共有する。
本文の内容をふまえているか、魅力が伝わる内容になっているかを確認する。

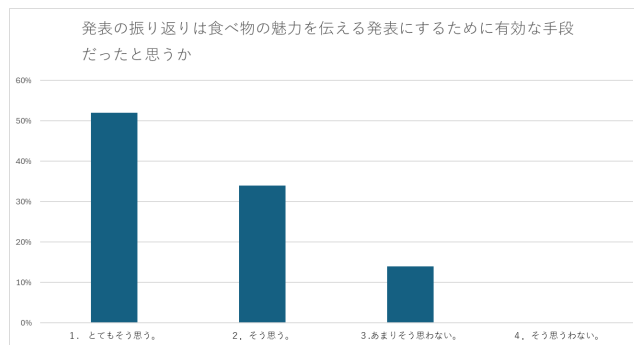
6 成果と課題

(1) 成果

- ・教科書の内容理解を **oral interaction** を通して行ったことは英語で内容を理解しているかを確認することができたり、英語で理解した内容を発表させたりできたりした点で有効であった。
- ・ペアで発話後にお互いの発表の振り返りをするこ
とで、より魅力が伝わるにはどうすればいいか考
え工夫することができた。
- ・ペアで発話した内容をペア同士やクラス全体で
共有することで、どのような情報を伝えればそ
の食べ物の魅力が伝わるかや使うべき表現を共
通理解することができた。

(2) 課題

やり取りの途中に振り返りを行ったことに関し
てアンケートを行った。「発表の振り返りは食べ物
の魅力を伝える発表にするために有効な手段だ
ったと思うか。」という質問に対し、「とてもそう
思う。」「そう思う。」と答えた生徒が80%以上と
比較的高い数値であった。しかしながら、「あまり
そう思わない。」と答えた生徒の理由の中には「何
をもって魅力とするのかわからず、伝えるべきこ
とに迷った。」という趣旨の意見もあり、どのよう
な事柄が「魅力」であるかについて理解が不十分
だったことがわかった。教師のモデルを示す際
や全体共有をする際に「魅力」とはどのような
ものを明示的に生徒に示す必要があった。例
えば、モデルを示した後に教師が「魅力」を
伝えようとしていた表現はどの表現だったか
を生徒に問い、「味」「触感」「食べ方」「
値段」等のカテゴリーに分けながら生徒の
意見を板書することを通して共通理解する
ことなどが考えられる。



(授業者：中川 拓也)

Ⅲ 第3学年実践事例

単元名：Reading① Faithful Elephants

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 3)

1 課題設定

「飼育係は、何と叫んだのだろうか？飼育係の気持ちになって英語で台詞を作ってみよう」

2 単元の目標

物語文「Faithful Elephants」の読解を通して、平和の尊さについて考え、平和な社会をつくるために自分たちができることは何かを相手に伝えることができる。

3 本校の研究と本実践の関わり

本校英語科では、「読む」領域における深い学びを実現する授業づくりには、生徒が主体的に英文に関わり、読んで理解した内容についてやり取りを通し、理解を深めることが必要だと考えている。さらにやり取りを通して得た情報を書いたり、他者に話したりするなどの言語活動を組み込むことによって、生徒はより確かな「読み」の技能を獲得できると考える。

本単元は戦前、東京の上野動物園で実際に行われた戦時猛獣処分をもとに書かれた戦争文学作品『かわいそうなぞう』を1988年にDykes 土屋明子が英語に翻訳した“Faithful Elephants”の簡略版である。

本授業実践ではオリジナルの絵本を読解後に、挿絵に台詞を考えるという言語活動を行った。生徒たちは、登場人物の心情を想像すること、言動の理由を考えることで登場人物への理解が深まり、より物語を深く読む技能を身に付けることができる。そして、再度全体を読み返し、根拠となる叙述をテキストから考え、台詞作成の背景について英語でやり取りを行うことができる状態を深い学びの状態であると設定した。

「戦争」というテーマは、修学旅行での平和学習を続けてきた生徒にとって、非常に関心の高い内

容であった。昨今の世界的に不安定な社会情勢下で、戦争の悲惨さについて知らない生徒に対し「恒久的に平和な社会とは何か？」「その実現のためにすべきこととは？」について考えることは、単元における平和について深く考えることに繋がったと考えた。

4 全体計画（8時間：本時5／8時間）

- 第1次 ・本文の内容理解 (3時間)
- 第2次 ・絵本「かわいそうなぞう」の内容理解。挿絵の台詞を考える (2時間)
- 第3次 ・平和な社会の実現についてやり取りを行う (3時間)

5 本時（6／8時間）の授業の実践

(1) 物語を振り返る。

教科書の挿絵を用いて、今まで読んできた物語の概要を飼育員の視点から振り返らせ、3匹の象と飼育員との関わりを中心に教師と生徒でやり取りを行った。

【教師と生徒の対話例】

[1枚目の写真について]



T: How did they (the zookeepers) feel when they got the order?

S: I think they must have felt painful.

T: Why do you think so?

S: Because they took care of them for a long time. They felt angry and shocked, too.

[2枚目の写真について]



T: Why didn't they use a gun to kill them?
 S: Because they hoped that the war would end soon and Tonky and Wanly could live a little longer.
 T: Why do you think so?
 S: From the text, they loved eating potatoes. Zookeepers wanted to kill them with their favorite food. Killing them by gun was painful for them.

教師からの発問は、本時までの本文内容理解における学習課題(1.How did they feel when they got the order? 2.Why didn't they use a gun to kill them? 3. What can we do for the world to make it more peaceful?)である。本文内容理解における各時間の学習課題の設定においては、推論発問を中心に構成した。「なぜ銃で殺さなかったのか?」のような質問内容は本文には明確には書かれておらず、物語全体を読解後に関連する英文を繋げることでしか推測できない。読んだ後のやり取り領域を活発化させるために、意見や推量を発話しやすい質問項目を選択した。



(2) 本時の課題を確認

【実際に使用した絵本の場面】



[出典 Faithful Elephants: A True Story of Animals, People, and War]

課題は、絵本上の実際の台詞を当てることに焦点を置いてはおらず、これまでの学習課題同様になぜそう考えるのかの理由や根拠を明確に述べることを重視したものである。これまでの本文理解から推測できることや、独自に調べた史実を基に意見を構築することを期待した。以下の教師のモデルは根拠をもって意見を主張する話し方を中心に構成した。

【教師の例】

T1: Look at the monitor. Please look at this. I guess he shouted "I hate the war! Why did they need to be dead? They were totally innocent animals. I hate the war." I made this because on the page 46, at the line 2 it says, "They didn't want to kill them, but they had to follow the order.". So, they must have hated the Army and the war.

【言語材料】

意見を述べる表現

I guess he shouted, “ 台詞 ”
 I think he said,” 台詞 ”

根拠を述べる表現

On the page 数字, it says “ 記述内容 ”
 at the line 数字

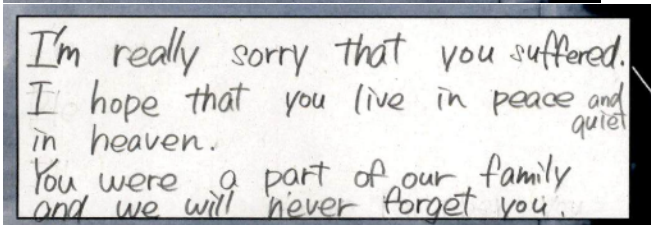
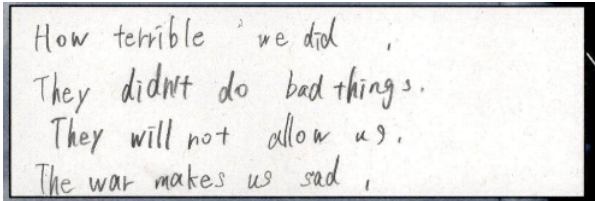
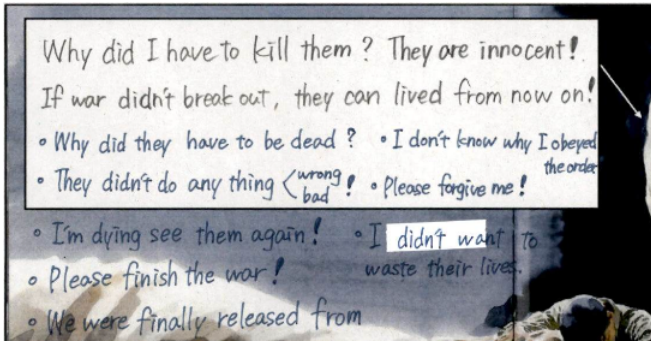
結論を述べる表現

So, they must have felt ~

教師のモデル内で使用した言語材料に関しては前時までに生徒が学んできた表現である。

(3) ワークシートに台詞を記入

【生徒の記入例】



生徒が書いた英文の中で多かった文法項目は感嘆文、疑問文が全体の17%と多い結果となった。How 形容詞 it is! の中で使用された形容詞は cruel (残酷な), terrible(ひどい)、incompetent(無能な)等の形容詞が使われ、生徒は軍の命令に背くことができなかった飼育係の心情に沿って英文を読み進めていたことが分かる。また、I felt 形 や I'm sure that ~ / I'm sorry that 等で意見を述べた生徒は that 節中に guilty(罪深い)、や relief (安堵、安心)等の形容詞を使っていた。象の死が、飼育係に逆に安堵感を与えたのではないかと推察する生徒が数多くいた。

(4) 台詞とその理由について、ペアで発表

【生徒の会話例】

S1: I think he said, "I didn't want to kill animals anymore! What a harsh Army! No more war."
 S2: Why do you think so?
 S1: Because the Army only ordered zookeepers to kill animals. They killed them by themselves.

S2: I see.
 My answer is "I want the Army to believe these elephants are not dangerous." In the textbook, they were smart enough to understand zookeepers.
 S1: You're right. Actually, they didn't eat poisoned potatoes when zookeepers tried to kill them.

(5) 全体共有

台詞について感情を込めて音読させた後に、その理由について教科書の本文から読み取ることができるとことや、絵本(かわいそうなぞう)から知り得た情報等を付け加えて発話させた。

【教師と生徒の対話例】

S1: I wrote "All animals, I'm so sorry. I made irreparable mistakes. Why did we go to the war?"
 T: What do you mean by "All animals"?
 S1: I mean that war killed not only dangerous animals but also safe animals too. From the textbook, I think elephants are very safe. We should think about another plan.
 T: That's a really good idea. Everyone, do you have another idea instead of killing animals?
 S2: They should have made such animals move to local places or other foreign countries.

全体共有時には「象を殺す以外に他に方法はないのか?」といった問いを発し、生徒がより活発にやり取りを行えるように促した。

【教師の問いに対する生徒の考え】

<殺す以外の手段>
 They should have made such animals move to local places. ↳ foreign countries
 They should have used stronger cages.
 I want to see their tricks again.

They should have used stronger cage.

(6)「平和な世界の実現のために私たちは何ができるのか」という問いに答える。

【実際の教師と生徒のやり取り内容】

T: Now, it's time to think about our lives.
We often have some trouble with friends and family. What can we do to make our lives more peaceful? It must lead to how we stop the war in the future.

S1: I think we should communicate more and more. We often fight with friends when we don't understand them.

T: What do you think about S1's opinion?

S2: I think it is a good idea.
Because by knowing each other more, we can become a better friend.

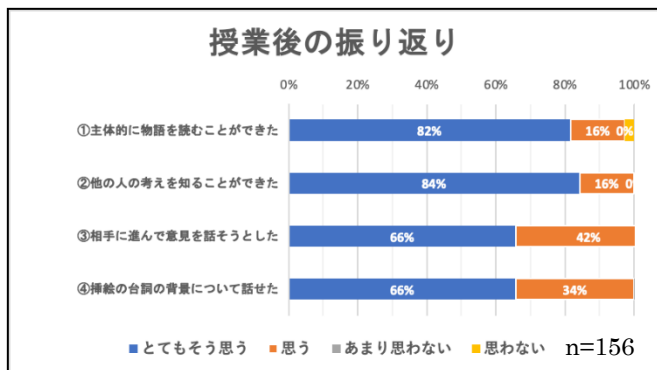
その他、より平和的解決策については We should respect each other. や We need to know another culture.等が意見としてあった。

6 成果と課題

(1) 成果

- 本作品「Faithful Elephants」を読解資料として使用したことは、授業後の振り返りからも物語や当時の戦況等への興味関心を高め、教科書本文の内容理解を深め、生徒同士のやり取りを活発にすることができた。

[授業後の振り返りアンケート結果より]



- 教科書等の挿絵の活用は、物語の構成や登場人物の心情理解を促し、生徒の物語全体の内容理解を深めさせることができた。
- 挿絵の台詞を記入させ音読させたことは、登場人

物の心情理解を深め、よりオーセンティックな発話に繋げることができた。

(2) 課題

- 物語の全体構成や段落構成に焦点を当て、読解の学習を進めることができていない生徒が多くいた。そのために今後は、英文の内容理解をより深めるためのグラフィック・オーガナイザー等の思考ツールを使うことで、文章理解度や全体を踏まえての読解ができるよう学習補助教材を見直し、やり取り等の別領域にも繋げたい。
- 台詞を考えさせる場面の選出では意見が多様化せず、同じような心情理由や原因を話していたので、物語の場面の抽出は以後、生徒のやり取り時に意見や考えが相違した内容が予期されるような場面を選出することが必要だと感じた。

(授業者：西出 忠司)